

〔結果〕1. Isolator system 使用により培養開始後18時間以内に5例のIVHカテーテル感染症症例を診断しえた。2. IVH 施行中カテーテル感染症を疑わせた症例の68.8%においてisolator培養が陰性であり、同systemを使用することにより不必要なカテーテル抜去を防止しえる可能性が示唆された。

16. 右下腹部痛に対するガストログラフィン注腸検査法の有用性について

(朝霞台中央総合病院 外科)

吉野 浩之・村田 順・
金 英宇・椋棒 豊

右下腹部痛を来す疾患は多彩である。急性虫垂炎、大腸憩室炎、回盲部腸重積症、大腸腫瘍による大腸閉塞、便秘等が鑑別診断として考えられる。我々、外科医は緊急手術を要する急性虫垂炎を常に念頭においていなければならない。その診断には、問診、触診、血液検査、腹部単純レントゲン写真、超音波検査等が行われている。我々はこれらの諸検査に加えガストログラフィンを使用した注腸検査を行っている。急性虫垂炎を疑わせる注腸造影検査所見として、1) 多くの場合、虫垂は造影されない。2) 虫垂の急激な断裂像。3) 不規則な内腔。4) 浮腫状の虫垂間膜による盲腸の圧排像。5) 盲腸の陥凹。6) 回腸末端の圧排像等である。これらの所見の有無によって急性虫垂炎の診断および上記した疾患の鑑別診断に有用であり、我々はこの検査法を積極的に行うことによってよい結果を得ているので報告する。

17. 術前診断のついた閉鎖孔ヘルニアの1治療例

(社団法人 伊勢崎佐波医師会病院 外科)

河 一京・笠井 恵・安部 龍一
(同 内科) 吉田 寿春

閉鎖孔ヘルニアは比較的稀な疾患で、一般的には術前診断が得られることは少ない。

臨床的には、女性高齢者に好発、イレウス症状で発症し、比較的緩慢的な経過をとり、結果として、手術のタイミングを失ってしまい、予後不良となることが多い。またイレウスとして緊急手術を受け、はじめて発見されることが多い。

最近われわれは、超音波検査およびイレウス管による小腸造影により、術前診断を得て、手術を実施し、治療せしめた1例を経験したので報告する。

18. 手術既往のない絞扼性腸閉塞症例の検討

(西新井病院外科)

宮下 美奈・康 錫柱・西 純一

最近我々は、開腹手術の既往はないが、その腹部所見より、絞扼性イレウスが疑われたため、比較的早期に開腹し、腸管切除は行わずに、整復、解除のみにて治療せしめた3症例を経験したので報告する。

第1例は24歳男性で、上行結腸間膜異常窩に小腸が嵌入了内ヘルニアによるもの、第2例は60歳女性で、大網と横行結腸脂肪垂との癒着による索状物による絞扼性イレウス、第3例は55歳女性で、S状結腸間膜裂孔に小腸が嵌入了内ヘルニアによるものであった。

いずれも、術前診断は非常に困難であったが、腹膜刺激症状が出現したため、疑診での開腹が行われた結果、絞扼性イレウスが判明したというものである。

19. S状結腸に狭窄を生じたクローン病の1例

(立川中央病院 外科)

青木 淑恵・四條 隆幸・加藤 孝男・
藤井 昭芳・木村 恒人

患者は28歳、男性。主訴は下腹部痛、下痢である。白血球12,800、血沈59/93、CRP(+)。注腸にてS状結腸に狭窄を認め、内視鏡では肛門より約18cmの部位に全周性狭窄を認め、生検でgroup 2であった。腸結核、クローン病などの炎症性病変、大腸癌が疑われ手術施行した。開腹時所見ではS状結腸が小腸一部と癒着が著明でS状結腸切除と小腸部分切除施行した。切除標本は縦走潰瘍が主体で、潰瘍辺縁にpseudo polyp、タコイボ様びらん集簇が認められた。乾酸壊死はみられないが、肉眼所見、組織像の特徴からクローン病と最終診断した。

20. 皮膚筋炎に合併した直腸癌の1治療例

(牛久愛和総合病院 外科)

釘宮 睦博・馬場 順子・村瀬 茂・
木戸 訓一・倉光 秀磨

1916年、Stertzが皮膚筋炎の悪性腫瘍の合併例を報告して以来、特に中・高齢者の皮膚筋炎例にしばしば悪性腫瘍が合併することは良く知られている。本邦では、合併する悪性腫瘍は胃癌が最も多いとされているが今回我々は、比較的稀な直腸癌の合併例を経験したので報告する。

患者は65歳、男性で今年9月嚥下困難を主訴に来院、下肢の筋痛を伴う脱力感も出現したため入院となった。臨床症状および理学所見から皮膚筋炎と診断されたため、malignancyを念頭に置き消化管精査したところ、直腸癌を発見した。腹会陰式直腸切断術の適応と考え、全身麻酔下に手術を施行した。肉眼的進行程度はA₁N(-)S₀P₀H₀M(-)stage IIであった。術

後ステロイドの使用により皮膚症状は軽快している。

21. 蛍光分析によるセレン (Se) 測定法とその臨床的意義

中西 明子

セレン (selenium) は、生体に必須な微量元素である。各種担癌患者において血中セレン濃度の低下が認められることより癌発生の関連が示唆されるなど、最近、微量元素に対する関心が高まるとともに、その臨床的意義が注目されている。教室においても、血清中のセレン濃度を簡便に測定することにより、その臨床的意義を検討している。現在行っている検討項目は、1. 担癌患者における腫瘍マーカーとしての可能性、2. 炎症性腸疾患におけるセレンの役割、3. 長期静脈栄養実施に伴うセレン欠乏症の予防等について、研究を行っている。

対象は、各種癌患者、在宅 IVH 施行者、長期経口摂取不能者、炎症性腸疾患患者である。また、現在一般に認められている正常値がないため、良性疾患患者、健常ボランティアを用いてその正常範囲の決定を行っている。

方法としては、原子吸光法、蛍光法、比色法などがある。現在まで前2法での測定を試みたが精度と簡便さを考慮して蛍光法を採用し測定を続けている。

その測定結果より、1. 正常範囲の決定、2. 各種疾患における濃度、3. 在宅 IVH 患者の静脈投与における動態等について、若干の結果を得たので報告する。

22. 大腸癌の肝転移予知ファクターとしての Laminin の意義

齊藤 登

ラミニンは基底膜に存在する分子量80~100万の糖蛋白質で、癌の浸潤や転移に関与するといわれる。大腸癌の肝転移機序を解明するためラミニンの動態を血清学的および病理学的側面よりアプローチしている。

血清ラミニン濃度は術前の患者血清をラミニン P1 キットを用い、RIA 法にて測定した。これまで80例を測定し、そのうち40例につき CEA, CA19-9, CA125 と比較検討した。診断率では CEA に匹敵し、肝転移におけるラミニン陽性率は sensitivity 86% という成績であった。一方、組織ラミニン染色は術直後の標本を凍結切片、エタノール固定、ホルマリン固定の3方法で酵素抗体法を用いて染色している。現在、凍結切片のものが最も良好に染まり、原発巣と浸潤巣に分け染色される程度を5段階に分類し血清濃度と合わせ評価、検討している。

以上より血清ラミニン濃度測定と組織ラミニン染色を用い、ラミニンの肝転移予知能に関する研究成果を報告する。

23. 経口腸管洗浄液による注腸二重造影検査の新しい前処置法

宮崎 要

注腸二重造影検査の新しい前処置法を開発する目的で外来患者600例を対象として臨床研究を行なった。まず PEG-ELS (Golytely)、各種下剤、低残渣食を組み合わせた14の方法を設定し、そのうち最も優れた前処置法を決定した。ついで同方法と従来の Brown 変法とを無作為化臨床試験を用いて比較検討した。

結果：1. 14の方法のうち PEG-ELS 3,000ml, ラキソベロン10ml, ポンコロ食を組み合わせた GLB 法が最も優れていた。2. 無作為化臨床試験では GLB 法が Brown 変法により優れた前処置効果を認めた ($p < 0.001$)。3. 特に GLB 法は下行結腸、S 状結腸直腸において腸管洗浄効果、総合診断能力が Brown 変法より優れており、mucosal coating は同等であった。

以上より、GLB 法は注腸二重造影検査の優れた前処置法であると考えられた。

24. 術後合併症発生率から見た術前術後栄養管理の役割

(朝霞台中央病院 外科) 金 英宇

1988年9月より1989年8月までの間に、待機手術を目的として、当科に入院した胃癌、大腸癌、直腸癌患者に対して、術前の栄養管理が術後の合併症の発生率に対して関与するか否かについて検討した。

術前に IVH を7日間以上受けたもの、4日間未満のもの、術前に IVH を受けていないものの3群に分けて、それぞれパラメーターとして、体重、握力、上腕周囲長、三頭筋周囲皮膚厚、一般血液生化学検査、トランスフェリン、プレアルブミン、レチノール結合蛋白、C3、遅延型アレルギー反応を入院時、手術前日、手術後2週間目に測定した。

その結果術前に7日間以上の栄養管理を行った群に、明らかに感染性の合併症発生率が少なかったため、各パラメーターとを比較検討し報告する。

25. ヌードマウス転移モデル作製と CTL 移入による効果

三橋 牧

50歳、男性胃癌患者の転移リンパ節よりヌードマウス可移植性 cell line を樹立し、その性状について検討した。産生する腫瘍マーカーは、臨床所見と一致し、